Terra Incognita

未知なる大地をめざして　―追悼　井上民二

ブンヤとの三二年

安成　哲三

大学一回生の春、山岳部入部とともに知り合った井上民二とは、昨年で三二年目の付き合いであった。五月の連休での山行きでブンヤとあだ名が付けられてからこのかた、私は彼をブンヤという呼び名以外には、使ったことがない。なぜ、ブンヤかというと、その時のリーダーによれば、とにかく休憩の度に、まるで新聞記者のように、なにかしら一生懸命メモをしているからという極めて単純な理由であった。しかし、この時から、ブンヤはすでにフィールドワーカーとしての天分を持っていた。

さて、スポーツ登山に何となく飽きたらず、あるいは能力の限界を感じていた私は、もっと地球の未知なるところを探る探検に惹かれていた。暮れも迫ったある夜、たまたまブンヤの下宿で、彼とイヤミ（由良隆、旧姓伊藤隆）と私の三人は、安ウィスキーを飲みながら、ダベッていた。三人ともまったく同じような気持ちを持っていることがわかり、大いに意気投合してしまった。そして、地球上のさまざまなところへの未知への憧れを語り合っているうちに、パタゴニア、特に太平洋側のチリ・パタゴニアに行こうということになった。それに賭けるためには国内での山登りに年中振り回される山岳部ではとても無理だと、結局三人とも、二回生の半ばまでに探検部に移っていた。

なぜパタゴニアだったのか。私がここに強く惹かれていた理由は、高校生の時に読んだチャールス・

ダーウィンの「ビーグル号航海記」（岩波文庫全三巻）であった。高校の時に生物同好会だったブンヤもこの本は読んでいたようだった。地理的にも地球の最果てというにふさわしいし、同時に自然科学的にも非常におもしろそうに思えたからである。生物学を目指すブンヤにも、地球科学をやろうと考えていた私にも、若きダーウィンを惹きつけたパタゴニアに、何か我々にとっても、さらに新しいもの、未知なるものがあるように感じていたのである。

二回生から三回生にいたる一年間は、我ら三人はパタゴニア探検実現のため、奔走した。何せ、地球の裏側なのでお金がかかる。そのためには、金集めをしてくれる隊長さんがいる。何人かの先生に当たった結果、当時京大防災研究所の教授に就任されたばかりの中島暢太郎先生（現在京大名誉教授）が、しぶしぶか快くかはよくわからなかったが、とにかく引き受けてくださった。中島先生は、後で結局私の指導教官にもなり、ブンヤの仲人にもなった。現地での隊長補佐も兼ねて、我ら三人の他に山岳部ＯＢの井上治郎（一九九一年一月京大梅里雪山学術登山隊で遭難死）、ＡＡＣＫの寺本巌の両氏も加わることになった。

金集めは大変だった。夢とロマンを実現させるには、極めてハードな現実と膨大な雑用をこなしていかないと実現できないというパラドックスを、我われは始めて経験した。この経験は、しかし、ブンヤにも私にも、その後の研究や研究プロジェクトの遂行に大いに役立った。パタゴニア隊は、アンデスに栽培植物を探りに行くという山本紀夫さん（現在民博教授）と渡辺信君（現在富山大教授）の調査隊（隊長田中正武農学部助教授）と合同となり、京大探検部アンデス・パタゴニア学術調査隊という名前の大きな遠征隊になってしまった。しかし、両隊長を先頭に半年以上奔走して、数百社の会社回りを

した結果、約一〇〇〇万円という、当時（一九六八年）としては大変な額の募金をすることができた。

チリ・パタゴニアは予想通り、いや予想以上にすばらしかった。雨に煙るフィヨルドとチョルガ（ムール貝）の浜辺、鬱蒼としたチリブナの原始林の徘徊の果てに、忽然と現れた湖と氷河、どこまでも澄んで蒼い氷河上の川とそこに住む昆虫、そして旨いチリワインと氷河氷のオンザロック、……。このために賭けた二年間だった。

パタゴニアから帰ると、一九六九年、大学は、世間でいう大学紛争、我々にとっての大学闘争が吹き荒れていた。三人ともそれぞれにこの新しい「探検」に参加し、ふたたび勉強どころではなかった。ブンヤもイヤミもデモなどで警察にパクられた。ブンヤは農学部共闘の重要メンバーとして、常に先鋭的だった。パタゴニア行きでは、どちらかというと私が引っ張っていたが、今度はブンヤが、迷い悩んでいる私をアジり、引っ張る役であった。しかし、大学解体などと唱えながら、結局二人とも大学院に残ってしまった。我々の内なるパタゴニアがまだ生きていたようである。

それぞれ昆虫生態学、気象学とまったく異なる分野に進んだ。私は宇治の防災研究所にいたが、本部へ行くと、本籍のある理学部よりも、まず農学部の彼の研究室に足を向け、コーヒーを飲みながら彼に虫談義などをきいていた。休みは釣りや山登りだった。彼が奥さん（栄子さん）と結婚して、防災研近くの宇治のアパートに住むと、これ幸いと、週末はいつも井上治郎らと彼のアパートに押しかけ、酒盛りだった。つくばに移ってからも、京都に帰る楽しみは、ブンヤと会って、飲むことだった。飲むたびにいつも楽しく、そして、なにかしら、彼から刺激を受けていた。そんな状態で二〇年が過ぎた。

お互いに違うことをやりながらも、またなんか一緒にやろうや、と言い合ってきた。数年前には、生

態学と地球科学の学際研究をやろうと、ふたりで画策して、双方からの研究者を集めた研究会を開いたこともあった。そして、ようやく、生態学と気象学の接点が見えてきた。それが、サラワク熱帯林の一斉開花だった。ブンヤが事故に遭った機中で読んでいた本は「地球大気の歴史」であった。九七年九月六日という日付が入っていた。

ブンヤの突然の訃報を聞いた時、私は信じられなかった。信じたくなかった。サラワクの森で長期の調査を行っているのだと自分に言い聞かせた。そして一年経った今、彼のいない寂しさと空虚さが、毎日の何気ない生活のすき間に、じわじわとはいりこんでくる。

おい、ブンヤ、約束がちがうやないか。

（やすなり　てつぞう・筑波大学地球科学系）

回想、山岳部からパタゴニアまで

由良　隆

一九六六年四月に私は京大山岳部に入った。同期の山岳部入部者は三〇人以上いたと思う。団塊の一番手世代でもありにぎやかだった。そこでブンヤ、安成らと出会った。山岳部ではまじめな新入生